

## 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年度目)

### 1. 研究課題

(和文) 灌頂と即位の文化史

(英文) Unction and Coronation

### 2. 研究代表者

(氏名) 藤井 正人

### 3. 研究期間

平成23年4月 から 平成26年3月 まで

### 4. 研究目的 (400字程度)

本共同研究は、共同研究「王権と儀礼」(2005.4-2011.3)を進展させるため、テーマを新たに  
して発足させるものである。前共同研究では王権とそれに関わる儀礼全般を対象としてきたが、  
この共同研究では、古代インドなどにおいて即位や入門の儀礼で中心的な行為となっている「灌  
頂」に焦点をあて、その行為の基本形態、類型、変化、伝播、異文化との混交などに関して、文  
化史的アプローチから研究する。広範囲の地域と時代にわたる文化事象として、古代インドの、  
王即位式をはじめとするさまざまな祭式に現れる「灌頂」から、インド、中国、日本の仏教の入  
門入信儀礼における「灌頂」、さらには、天皇の即位儀礼としての「灌頂」などが研究の対象とな  
りうる。研究方法としては、各種事例の比較研究を進めるとともに、他分野の研究者に負担をか  
けない形で文献資料の基礎研究をも行う。具体的には、課題に関する研究報告を集中的に行う「研  
究集会」と、古代インドの王即位式に関するサンスクリット資料の校訂と訳注を行う「会読」と  
いう二種の研究会を、切り離れた形で開催して研究を進める。

### 5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

「会読」を中心に共同研究を行った。灌頂儀礼が詳細な形で現れる古代インドの王即位式(ラ  
ージャスーヤ)に関する文献研究のために、ヴェーダ祭式文献の中から、成立年代の比較的古  
いブラーフマナ文献(祭儀書)と新しいシュラウタスートラ文献(祭式綱要書)から、未翻訳  
の『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』と、文献および学派伝統の上でそれと関係のある未出  
版・未翻訳の『ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ』を取り上げ、両文献の当該箇所英語  
による訳と注を班員が分担して準備し、研究会において参加者全員で検討を行った。最終年度  
の本年度末で、ほぼ全体の訳注を作成し終えた。そのほか、「研究集会」として、12月にテキ  
サス大学オースティン校のパトリック・オリヴェイユ教授を招いて、古代インドの王権書である  
『アルタ・シャーストラ(実利論)』に関する公開講演・討論会を開催した。

### 6. 研究成果の概要 (400字程度)

本年度の各研究会での研究内容は以下のとおりである。

VadhSS = Vadhula-Srautasutra, TB = Taittiriya-Brahmana

6月21日 (会読) VadhSS 10.8.14-28; TB 関連箇所	堂山英次郎
7月5日 (会読) VadhSS 10.8.29-49; TB 関連箇所	梶原三恵子
7月19日 (会読) VadhSS 10.9.1-10.10.16; TB 関連箇所	手嶋英貴
8月2日 (会読) VadhSS 10.10.17-24; TB 関連箇所	大島智靖
10月25日 (会読) VadhSS 10.11.1-13; TB 関連箇所	池田宣幸
11月8日 (会読) VadhSS 10.11.14-26; 27-38; TB 関連箇所	小林正人、藤井正人
11月29日 (会読) VadhSS 10.12.0-16	藤井正人
12月13日 (研究集会) Material Culture in Ancient India and Kautilya's Arthasastra	P. Olivelle
3月14日 (会読) VadhSS 10.13	藤井正人

本年度末の段階で、両文献の王即位式（ラージャスーヤ）の箇所英語訳注をほぼ完成させた。これをもとに今後2年をかけて出版原稿を作成する予定である。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

公開講演・討論会（2013年12月13日）[ゲストスピーカーを招いて]

Patrick Olivelle, Material Culture in Ancient India and Kautilya's Arthasastra.  
第6回国際ヴェーダ学ワークショップ（2014年1月7-10日 インド・カリカット）基調講演  
Masato Fujii, The Sautramani in the Vedic Coronation Rituals. (Frits Staal  
memorial keynote address)

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数		
		外国人	大学院生	外国人	大学院生	
学内 (法人内)	2	6	1	49	2	
国立大学	2	5		45		
公立大学						
私立大学	1	1		8		
大学共同利用機関法人						
独立行政法人等公的研究機関						
民間機関						
外国機関	1	1	1	1	1	
その他						
計	6	13	2	103	3	

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数  
2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	3	
うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	0 ( )

※下段の ( ) 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割			
論文数			
うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	( )	( )

※下段の ( ) 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名